

高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告 (第17報)

—参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目したタグラグビーにおける支援内容と方法の検討(2)—

佐々木 全*・今野 文龍**・名古屋 恒彦***

(2013年3月5日受理)

Zen SASAKI・Ayaru KONNO・Tsunehiko NAGOYA

A Practical Study of "Eburi Class" for Children with High Functioning Pervasive Developmental Disorders (17)

— Through the Implementation of "tag rugby football" in the curriculum Part 2 —

I 問題と目的

筆者らは高機能広汎性発達障害^{注)}のある小学生を対象としたエブリ教室を開催している(佐々木, 加藤, 2011¹⁾). 通年開催であり, 上半期にはタグラグビー, 下半期には劇活動を活動内容としている。

エブリ教室は, 立ち上げ当初から数年間ソーシャルスキルトレーニングを目的とし志向してきた。ソーシャルスキルは日々の生活の充実という目的に資する手段である。現在のエブリ教室で目的として志向するのは, 休日活動の充実である。これは, 参加児童にとって, 日々の生活の充実の一部にあたるものである。「トレーニング志向」が日々の生活の充実に向けて, 手段としてのスキルを求めるという間接的な接近であることに対して, 「生活の充実志向」は日々の生活の目的そのものを実現しようという直接的な接近である。

「生活の充実志向」におけるスキルの取り扱い, 活動自体に必然的に内包される。スキルは, 必要に応じた手段的な価値として認められ, 自然かつ必然的な活動場面において, その習得や発揮を期待される, ということになる。例えば, タグ

ラグビーに関する競技スキルである。また, ソーシャルスキルはタグラグビーの活動に必然的にかかわっており, その習得や発揮は活動自体に内包される「トレーニング効果」によって習得されることもある。例えば, タグラグビーの試合に勝った参加児が「やったぞ, 最高だ!」と感情を言語化する。ミスをした仲間に「ドンマイ, 次頑張ろう」と励ます。敗戦を振り返り, 感情を抑えて改善策を検討しあう。そのような参加児の言動が, 量的にも質的にも増している。

そもそも, 日常の生活中には必然的に「トレーニング効果」がある。高機能広汎性発達障害の有無を問わずソーシャルスキルトレーニングが理論化される以前であっても, あるいは, 現在においてソーシャルスキルトレーニングを受けなくとも, 日常生活中でソーシャルスキルをそれなりに習得している人がいることはそれを裏付ける。換言すれば, 日常の生活中にある「トレーニング効果」を抽出, 理論化したものがソーシャルスキルトレーニングをはじめとする各種トレーニングという方法論である。

さて, 本県内外で展開されているエブリ教室に類するグループ活動は, 「トレーニング志向」で

*いわて高機能広汎性発達障害のある人を支援する会(「エブリの会」)、**岩手大学大学院教育学研究科(修士課程)、
いわて高機能広汎性発達障害のある人を支援する会(「エブリの会」)、***岩手大学教育学部

あることが多い。例えば、それを目的として明記し実働していたり、あるいは、トレーニング志向を感じさせない緩やかな活動であっても、活動の趣旨を語る際にトレーニング志向的な専門用語を借用し自らを説明したりする(例えば、井沢、岡村、長澤、阿部他(2012)²⁾；中島、門脇、杉本(2012)³⁾；佐々木、2012⁴⁾)。このような状況にあって、筆者らは、エブリ教室の意義として、日々の生活の充実を明記しその価値を先行的に提案していきたいと考えている。その一環として、筆者らはエブリ教室の実践を通じて、参加児に対する支援の最適化を追究してきた。本稿は、活動内容としてのタグラグビーを焦点とし、そこでの支援を実践的に検討するものである。

タグラグビーとは、ラグビーの簡易普及版である(鈴木、2009⁵⁾)。これは、一般的に馴染みの少ない競技だっただけに、共に活動する筆者らスタッフにとって、競技自体の理解や課題分析が浅かった。現在においても、スタッフ間において支援の内容や方法について、その共有、蓄積が必要である。

そこで、筆者らは、スタッフによる支援の内容や方法について、実践によって得られた知見を整理することを試みはじめた(佐々木、伊藤、名古屋、2012⁶⁾)。エブリ教室において筆者らは、「タグラグビーに熱中して取組んでほしい」とねがい、①攻守それぞれのプレーにおいて目的的にプレーすること、②その過程では自分の力を存分に発揮して首尾よく、そしてチームとしての連携よくプレーすること、③プレーの成功と失敗に伴う葛藤をも含め、プレーの成果をチームメイトと共に分かち合うことを目指した。そして、これらを実現すべく、参加児一人一人に対する個別化・具体化された支援方法を講じる。このとき、その支援方法は、タグラグビーの一般的な戦略の検討に包括されるものであった。すなわち、タグラグビーに熱中すること自体を活動の目的として位置づけたときにはその支援方法は、あくまでもタグラグビーとしての自然さと必然さを伴う「ナチュラルサポート」であると考えてに至った。

本稿は、上記の試みの一環であり、参加児の活動や心的過程の変遷の分析及び、タグラグビーの参加児への支援内容・方法の効果を明確にすることを目的とする。具体的には、筆者らが今後の課題として指摘した3点について以下のように対応する。

すなわち、①「タグラグビーにおける支援方法の検証」については、既得の支援方法を別の参加児を対象として用いた事例を挙げることによって裏付ける。

②「新たな知見の蓄積」については、既得の支援方法のアレンジ及び、新たに開発した支援方法を挙げることによってその一助とする。

③「スタッフ間で伝達、共有可能な情報として活用しやすい表現形式の検討」については、既得の支援方法としてのプレーの状況(行動の過程)を視覚化した「マンガ形式」の活用と評価を行う。加えて、表現形式の更なる検討のために、「マンガ形式」に対照した心的過程と支援方法との関連を概念図として視覚化した「トータルな因果モデル」(佐々木、加藤、2011⁷⁾)を併用することを提起し、効果的な表現形式の試みとする。

Ⅱ 方法

研究の方法は、エブリ教室における実践とそれに基づく考察である。具体的には、タグラグビーにおける参加児の活動の様子と、それに関与した支援方法を、参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目し、逸話的に記述する。

ここで用いる資料は、2012年度のタグラグビーの実践記録である。これには、実践報告論文として過去に公表しているものに加え、活動の計画及び実践に関する構想、スタッフの事前事後ミーティングの記録を記した第一筆者の実践記録ノートや「エブリ通信」と称して第一筆者が発行している保護者宛の文書、記録写真をも含んだ。

なお、エブリ教室におけるタグラグビーの概要を以下に記した。

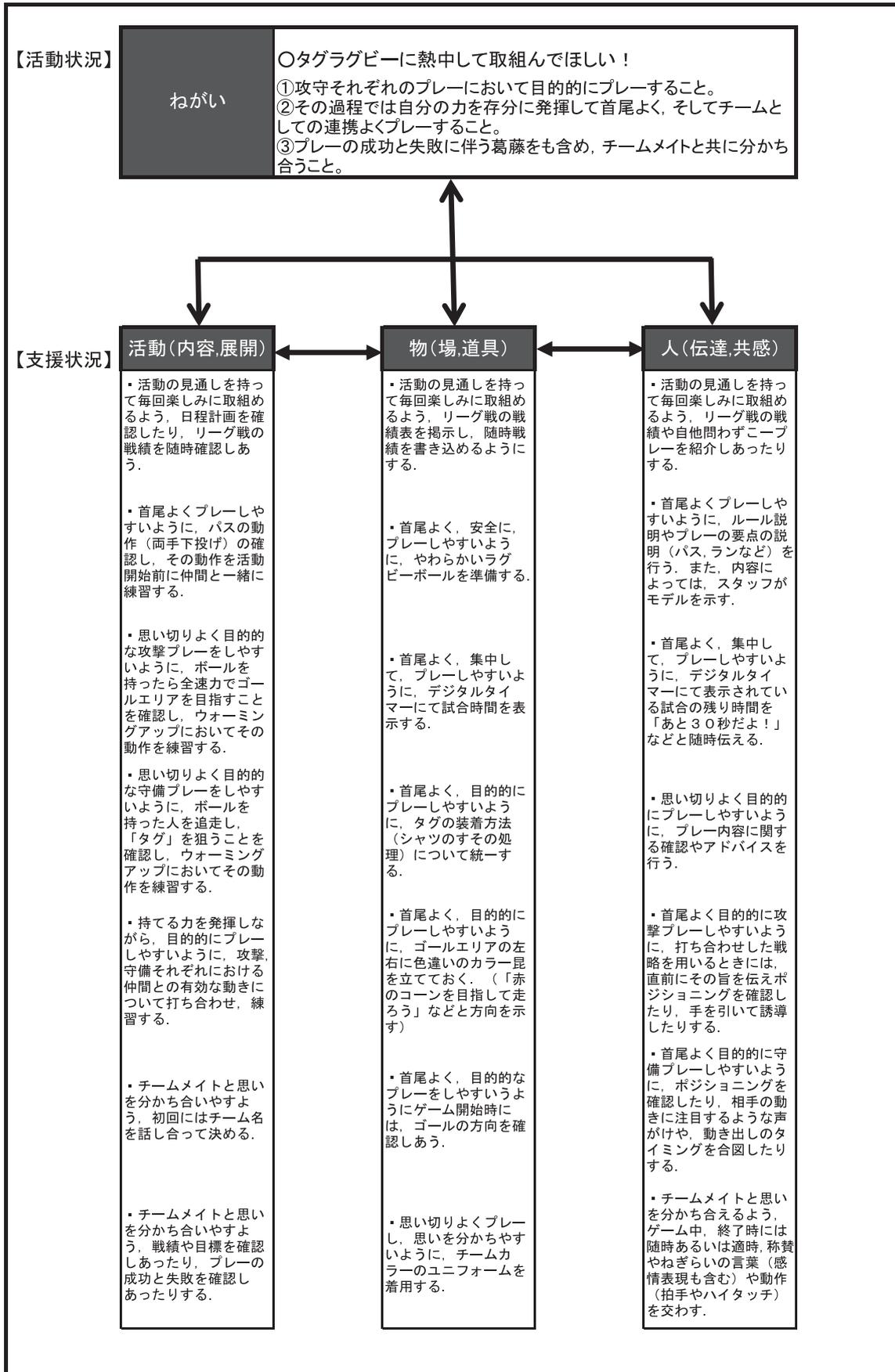


図1 参加児の心理過程と支援方法の関連概念図

1 参加児の概要

参加児は盛岡市内およびその近隣地域在住であり、高機能広汎性発達障害の診断があるか、その疑いがあるとされる。また、専門の相談機関等からの紹介だった。2012年度現在、7名の対象児(男女比=5:2)とそのきょうだい(未就学児、高機能広汎性発達障害ではない小学生を含む)が5名、全12名が参加した。なお、12名中3名が2012年度からの新規参加児だった。

2 タグラグビーにおける活動の目的

エブリ教室では、参加児に対する休日活動の提供を行う。その目的は、参加児にとっての休日活動の充実である。タグラグビーにおけるねがいとその実現のための支援方法については冒頭に記したが、これらを、参加児の心理過程と支援方法の関連概念図として図1に示した。これは、活動の全体計画であり、参加児一人一人の支援において具体化・個別化されるべきものである。

3 タグラグビーにおける活動の形態

活動では、4チーム編成し、それぞれ赤、黄、青、緑をシンボルカラーとした。また、各チーム3名の参加児と2名のスタッフで構成した。スタッフは、第一筆者を含めた現職教員有志、第二筆者を含めた大学院生や大学生有志、中学生有志、計8名であった。

活動は月一回第3土曜日、9:30~11:30までの2時間とし、盛岡市近隣の体育館を借

用して開催した。ウォーミングアップの後、チーム練習を経て、ゲームを行う。ゲームの戦績は、4月から8月までの活動期間中累計され、それをもって優勝を争う。9月には、同様にタグラグビーに取り組んでいる姉妹グループ「A c t. (アクト)」(A c t. マネージャー, 2011⁸⁾)との交流戦を行う。活動期間中の日程計画と各回のタイムテーブルを表1、表2にそれぞれ示した。

タグラグビーの主なルール大まかなルールは、次のとおりである。すなわち、①1チームを5名で編成する。プレーヤーは、タグベルトを装着し、腰の両側にあるマジックテープでタグを二本貼り付ける。②攻撃では、ボールを持ってゴールラインに走り込むこと(「トライ」と称するプレー)で得点となる。③パスは自分よりも後ろにいる味方に行く。④守備では、ボールを持っている相手のタグを獲ること(「タグ」と称するプレー)で相手の進行を止める。タグを獲られたプレーヤーは、立ち止まりタグをつけなおし、味方にパスを出してプレーを再開する。⑤得点した場合やタグを5回連続で獲られた場合や、ルーズボールを獲られた場合などには攻守交代する。

なお、ゲームの細部においては、会場の物理的な制限や、参加児の様子に合わせてタグラグビーの競技としての独自性を損なわない程度にルールの変更やアレンジを施した。参加児の様子に合わせたルールの変更には、不慣れさに応じた軽減的、配慮的な変更もあればプレーの成熟に応じた発展的な変更も含んだ。

表1 日程計画 (2012年度)

回数	日程	活動内容	備考
1	4.14.		
2	5.19.		
3	6.16.	タグラグビーリーグ戦	
4	7.14.		
5	8.25.		リーグ戦終了
6	9.22.	タグラグビー交流戦	A c t. チームを交えてのトーナメント戦

表2 タイムテーブル

時刻	内容
8:45	スタッフ集合, 会場設営, 事前ミーティング
9:30	参加児集合, 身支度, スケジュールの確認
9:40	導入(準備体操, ウォーミングアップ, スキルドリル)
9:50	展開①(チーム練習)
10:05	展開②(試合)
11:15	終結(クールダウン, 成績発表, 感想交流, 清掃)
11:30	参加児解散, スタッフ会場撤去
11:50	スタッフ事後ミーティング
12:45	スタッフ解散

Ⅲ 結果

活動に際して、スタッフは、活動の前後でミーティングを行い、チームの戦略や参加児の取組みの様子、支援方法の検討を行った。このとき、スタッフ間で既得の支援方法に関する知見を伝達、共有、活用すべく、既得の支援方法を視覚化した「マンガ形式」(佐々木, 伊藤, 名古屋, 2012⁹⁾)を配布し、プレーの実技をもって確認しあった。活動では、4チームそれぞれが「チーム練習」にて戦略を検討し、その中でチーム事情(チームの構成員の特性やポテンシャル)に応じて既得の支援方法を取り入れ、練習し、試合を行った。リーグ戦では、それぞれのチームが戦略を駆使し、切迫した試合を披露した。また、戦略の成熟(完成度の高まり)も勝敗に影響し、リーグ戦の順位の大きな変動をもたらすなど盛り上がりのある取組みとなった。

以下ではそれらの取組みの一端を個別的、逸話的に記す。

1 既得の支援方法(「守備における前衛と後衛の役割分担と動き」)を別の参加児に用いた事例①

～寛人君(仮名, 2年生, 男児, 緑チーム)

(1) 活動の様子と支援方法

寛人君は、2012年度からの新規参加児であり、タグラグビーに取組むことも初めてだった。意欲的であり駆け回るなどの運動を好んで取組み、運

動量豊富なプレースタイルの発揮が期待できた。一方で、プレーにおいて戸惑いがあり、プレーの目的をその都度、瞬間的に判断し実行することが難しいようだった。

守備では、ボールを持って駆け上がってくる相手選手に自分から注意を向ける、あるいは絞り込むことがしにくいようだった。その結果、守備において目的的な動きをしにくく、位置についてもキョロキョロと辺りを見回し浮き足立っていた。

そこで、寛人君が守備において、守備のポジションや役割を理解し、目的的なプレーをする姿をねがった。このとき持ち前の運動量が強みとして活かされるように次のような支援を講じた。①寛人君と他のチームメイトがペアとなり、二人で相手のボールを持って攻め入るプレーヤー(以下、ボールキャリアと称す)に向かっていくという「前衛」のポジションにした。②相手が動き出したことを確認後、コート中央付近から追いかけることを始める。③スタッフは、寛人君が相手の動きに注目しやすいように、攻守交替直後に素早く守備位置に戻るよう声をかけ、そこで相手を待ち構えることを促す。④その間に相手ボールキャリアの注目、その動きへの注目、追視を促し、動作開始の適時をはかる。④スタッフが、適時に肩を叩いて「ゴー！」と声をかける合図を送る。

(2) 評価

攻守交替直後の場面、スタッフが寛人君に、「(守備位置に)戻って！」との声かけをした。寛人君

が守備位置に付いたら、スタッフが寛人君とペアのチームメイトの二人の肩に手を置き、背後から、「ほら、真ん中に来たよ」などと相手ボールキャリアの位置を口頭で確認し、注視及び追視を促した。ボールを持った相手の動きについて状況を伝える。そして、相手との距離を測り、「ゴー！」と合図した。

寛人君は当初、ペアのチームメイトの動きによって駆け出した。結果的に駆け出しが一瞬遅れた。しかし、次第に駆け出しの合図に応じて素早く駆け出すようになった。活動時期終盤では、自分から相手ボールキャリアへの注視及び追視を行って自ら駆け出すようになった。この様子ならびに心理過程と支援方法の関連を図2、図3に示した。

また、ゲームがタグなどによって一時停止し、そこから再開するには、相手チームのパスから始まる（以下、リスタート場面と称す）。前述した攻守交替直後の場面では、相手の攻撃開始位置と守備位置に物理的な距離があるために相手の動きを把握する時間的なゆとりがあるのに対して、リスタートの場面ではそれらがなく切迫した状況である。この場面でも同様に、「パスがどこに行くか見てよ」、「パスが通ったらゴーだぞ！」とパスを目で追うように促し、ボールの持ち手が確定した時点で肩を叩いてゴーサインを行った。

時間的切迫状況下であることや、直前に相手のタグを獲得などの守備プレーの成功があると、達成感や安堵感によって一層守備への切り替えが遅れがちである。しかし、ゲーム中には攻守交替直後の場面よりもリスタート場面が多い。そのため、寛人君の慣れもスムーズであり、活動時期終盤では、相手チームの素早いパスに対応し、ゴール直前にタグを獲得の好プレーを発揮した。

寛人君がボールキャリアを追走するというプレーは、相手の攻撃に対する最初の対応をするという役割だった。ここではボールキャリアに一点集中すればよいために、寛人君は持ち前の運動量を遺憾なく発揮し始めた。例え、この守備で相手のタグが取れなくとも、「後衛」のポジションのチームメイトがフォローするという守備戦略を用いたため、相手を追い掛け回し、その進路を限定させることで十分に守備の役割を果たすことになった。

これら、寛人君の目的的なプレーの確立は、必然的にチームとしての目的の範囲内に位置づけられる。よって、そこで得られるプレーの成功と失敗についてチーム内で共感しあい、ハイタッチをしたり笑顔をかわしたり、励ましあったりすることが本音でなされるようになった。



図2 守備における前衛と後衛の役割分担と動き 前衛の寛人君と、後衛の渚さん

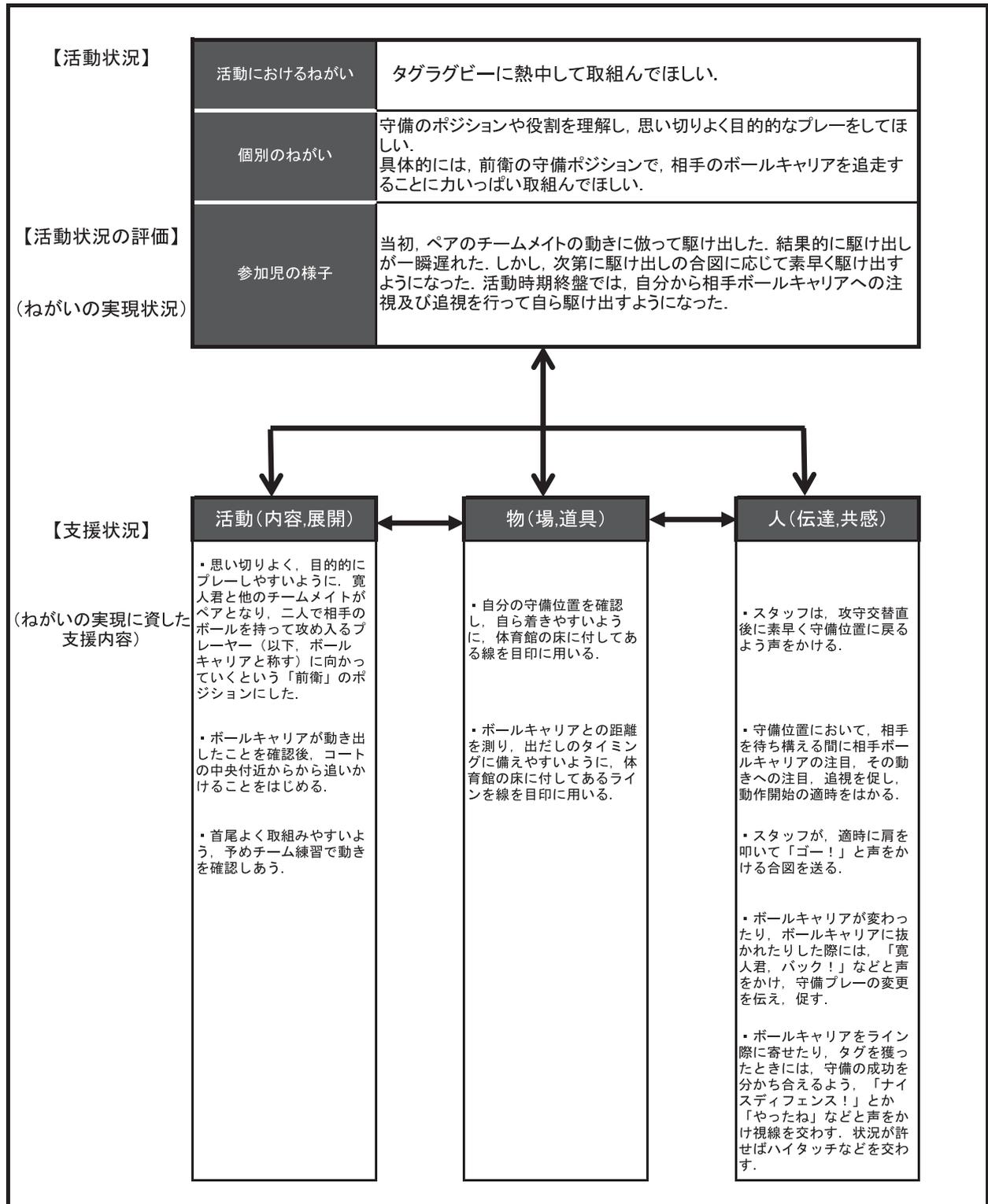


図3 守備プレーにおける、寛人君の心理過程と支援方法の関連概念図

2 既得の支援方法（「守備における前衛と後衛の役割分担と動き」）を別の参加児に用いた事例② ～渚さん（仮名，5年生，女兒，青チーム）

（1）活動の様子と支援方法

渚さんは、二年来の参加児であるが、コンディションが整わず欠席することが頻回にあった。そのため、タグラグビーに対しては好意的であるものの経験不足であること、チームメイトとのかかわりが少ないことから、気おくれして持ち前の積極性を発揮しにくいようだった。一方で、ルールやゲームの流れを的確に理解する知的なプレーヤーである。例えば、守備場面で、当初スタッフは渚さんがプレーの経験が少ないことを加味して、シンプルな理解と動作によって成立しやすい前衛のポジションを勧めた。このとき、渚さんと他のチームメイト2人と一緒に取組むことにした。相手ボールキャリアの動きに合わせて3人が一斉に追走する。それを何度か繰り返すうちに、渚さんは、チームメイト二人の駆け出しの後から駆け出すようになった。それは、相手ボールキャリアに迫る時間的物理的な変化をつけること、具体的には、相手ボールキャリアが3人を一気に振り切ることを防止し、2人が振り切られても渚さんがバックアップすることを意図してのことだった。

そこで、渚さんが、持ち前の状況判断力を活かし、積極的、戦略的にプレーする姿をねがい、次のような手立てを講じた。①渚さんの発想を活かし、「前衛」ポジションのプレーヤーが相手の動きを限定したところで、タイミングを見計らって飛び出し、相手のタグを狙うという「後衛」のポジションにする。②「前衛」、「後衛」という守備の役割分担を戦略として確認しあう。③同じ後衛にスタッフが着き、運動量や走力相応に守備エリアの分担を行う。

（2）評価

渚さんは、「後衛」の守備位置であるゴールエリア前に着いて、「前衛」のチームメイトが追いつめるボールキャリアの動きを俯瞰しながら、自らの走力と相手の走力との兼ね合いで随時検討し駆け出しやポジショニングの最適化を図るような

状況判断によって、ボールキャリアに向かって駆け出し、相手のタグを獲り、相手のトライを阻んだ。この様子を前出の図2に示した。

これら、渚さんの目的的でチーム協働的なプレーの確立によって、そこで得られるプレーの成功と失敗についてチーム内で共感しあい、ハイタッチをしたり笑顔をかわしたり、励ましあったりすることがなされるようになった。渚さんは参加回数が少ないなりに、チーム内での存在感を得た。

3 既得の支援方法（「キャッチの代行と手渡しによるパス」）のアレンジした事例①

～寛人君（仮名，2年，男児，緑チーム）

（1）活動の様子と支援方法

前出の寛人君である。寛人君は攻撃で、相手守備に臆して駆け出すことを躊躇い後退りする様子があった。また、パスのキャッチも不確実で中長距離パスに対しては、迫り来るボールを注視あるいは追視しにくいようだった。

そこで、寛人君が思い切りよく、目的的にプレーをする姿を願った。このとき、ボールをキャッチすることがまだ難しい技術的な状況を察しつつ、むしろそれがチームメイトとの協働で解消され、積極的、戦略的な動きになるよう、次のような手立てを講じた。①チームとして左サイドを重点的に攻撃し、寛人君は右サイドで待ち構える。②サイドチェンジによって、相手守備が手薄な右サイドを寛人君が駆け抜けるという戦略を提案し確認しあう。③サイドチェンジのためのパスでは、寛人君がキャッチしやすい手渡し同然の短いパスを用いる。④キャッチの後にはゴールまでの短距離を駆け抜けるというシンプルな判断、プレーとする。

（2）評価

この戦略は、ゲームの流れの中でポジショニングやタイミングを合わせることが難しそうだった。そこで、左サイドで一旦タグを獲られるような場面を作り、そこで生じたゲームの中断中、ポジショニングを確認し、リスタートによるパスをもってサイドチェンジすることにした。このとき、

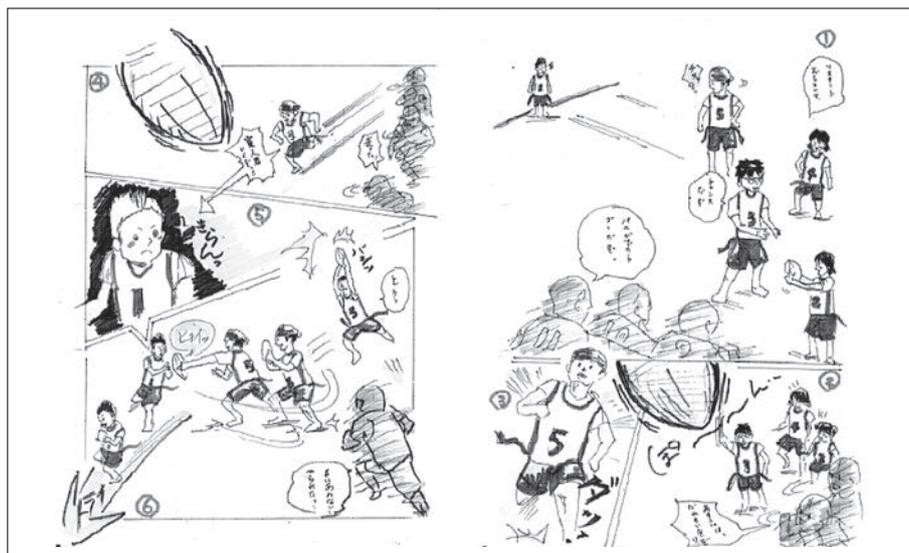


図4 キャッチの代行と手渡しパス 寛人君とのアレンジ

寛人君の隣にパスキャッチを代行・中継するためにスタッフが位置取りしたところ、相手守備陣に戦略を読みきられてしまった。そこで、以下のようアレンジを加え実行した。

パスキャッチを代行・中継するスタッフは、リスタートのパスをするプレイヤーの近くに位置取り、左サイドの重点攻撃の印象を相手守備に与える。しかし、リスタートのパスは右サイド、寛人君側の無人スペースに投げ込む。このパスに合わせて、スタッフが駆け込み飛び上がってキャッチし、着地点で寛人君に手渡し同然の短いパスをだす。これを受けた寛人君は、ゴールエリアに駆け込んでトライを決めた。この様子を図4に示した。寛人君は、このプレーの成功を喜びプレーに対する意欲を一層高めた。

4 既得の支援方法（「キャッチの代行と手渡しによるパス」）のアレンジした事例②

～久史君（仮名，4年，男児，黄チーム）

（1）活動の様子と支援方法

久史君は、2012年度からの新規参加児であり、タグラグビーに取り組むことも初めてだった。意欲的であり、ルールやチームの戦略の理解はスムーズだったが、反面、技術的な不慣れさのためにパスを受けた後のプレーを躊躇したり、急いでボールを取りこぼしたりすることがあり、このような

プレーの失敗を気に病み落ち込んだり不安感を強めたりする様子があった。

そこで、久史君が持ち前の戦略の理解力を活かし、思い切りよく、目的的にプレーをする姿をねがった。このとき、ボールをキャッチすることがまだ難しい技術的な状況を察しつつ、むしろそれがチームメイトとの協働で解消され、積極的、戦略的な動きになるよう、次のような手立てを講じた。①攻撃では、チームとして右サイドを重点的に攻撃し、久史君は左サイドで待ち構える。②チーム内で、左右への短く素早いパスをまわしながら、相手守備をかく乱する。③守備の隙をついて、左サイドの久史君にパスを回し、トライをねらうという戦略を提案し確認しあう。④久史君にとって、キャッチしやすい短いパスであり、そのタイミングは局面の状況によって変わるため、直前にスタッフが「ハイ！」と声をかけパスを出す。

（2）評価

久史君は、チームで打ち合わせたプレー内容の遂行に一点集中した。狭いライン際のスペースを積極果敢に駆け抜けようと繰り返し挑んだ。何度も相手守備に阻まれたり、転倒したりしたが、次第にチームのパスワークが洗練され、相手守備の隙をつくようなタイミングのよいパスが回り、久史君がトライを決めるようになった。この様子を図5に示した。

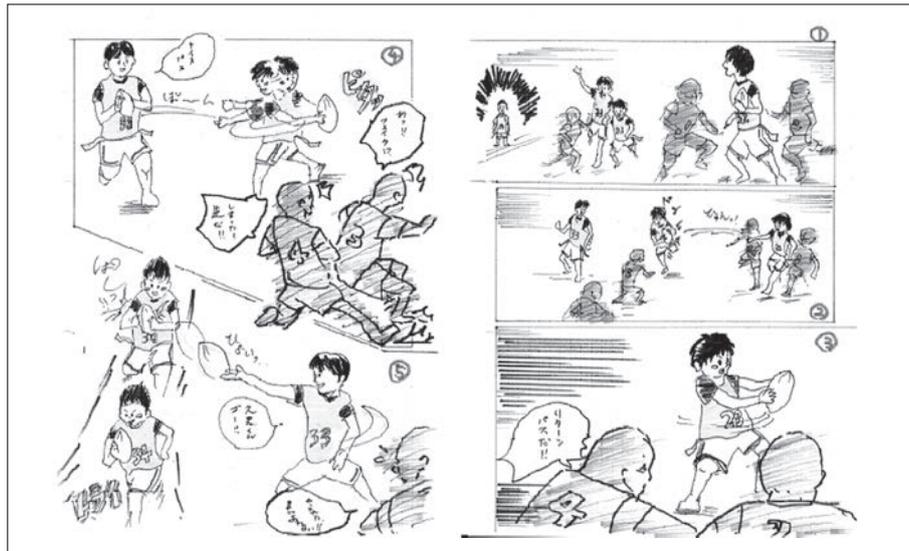


図5 キャッチの代行と手渡しパスによるパス 久史君とのアレンジ

このプレーは、チームメイトとの連携による成果として、チームのメンバー皆が笑顔で喜び合った。

5 既得の支援方法（「相手守備をひきつけて、走りながらのパス」）をアレンジした事例③

～隼人君（仮名，4年生，男児，赤チーム）

隼人君は、運動量豊富なプレーヤーであった。しかし、相手守備の動きを警戒し、トップスピードで振り切ることよりも減速し方向転換をもって交わそうとすることが多かった。このようなプレーの選択は、隼人君にとっては持ち前のポテンシャルを発揮しきれていない印象を得た。また、結果的に隼人君のボールキープの時間が長じることがチームとしての戦略上不利に働くことがあった。むしろ、他のチームメイトが左サイドでボールをキープし、守備をひきつけた後にスタッフを介して右サイドへの展開する戦略こそがチーム名と各々のポテンシャルを発揮することに資すると思われた。

そこで、隼人君が技術的、体力的なポテンシャルを発揮して、思い切りよく、有効なプレーをする姿をねがい、次のような手立てを講じた①チームとして左サイドを重点的に攻撃し、隼人君は右サイド後方で待ち構える。②相手守備が右サイドに偏った瞬間に、右サイドのフリースペースに向

けて、ロングパスを行う。③隼人君は、それに合わせて駆け込み、パスをキャッチしてトップスピードのままトライを決めるといふ戦略を確認しよう。④駆け込みのタイミングやキャッチングの技能を反復練習する。

（2）評価

隼人君は、左サイドから右サイドゴール前に投げられる勢いのあるロングパスに対して、トップスピードで駆け込み、正確にキャッチしトライを決め、チームを牽引した。この様子を図6に示した。

「A c t .」との交流戦では、上級生プレーヤーの守備をも振り切り会心のトライを決める場面もあり、持ち前の運動量や、スピード、キャッチングの技術などを遺憾なく発揮した大胆なプレースタイルが、チームを盛り立てた。チームメイトとハイタッチを交わした後は、隼人君のみならず、チームメイトの士気が高まり、攻守共に各プレーヤーの動きの速度が上がり、猛攻堅守のチームカラーが定着した。

3 新たに開発した支援方法の事例

～寛人君（仮名，2年生，男児，緑チーム）

（1）活動の様子と支援方法

前出の寛人君である。寛人君は、取り組み初期の攻撃場面において、ボールを持って駆け出した際、相手守備に迫られると、前進を躊躇し、立ち

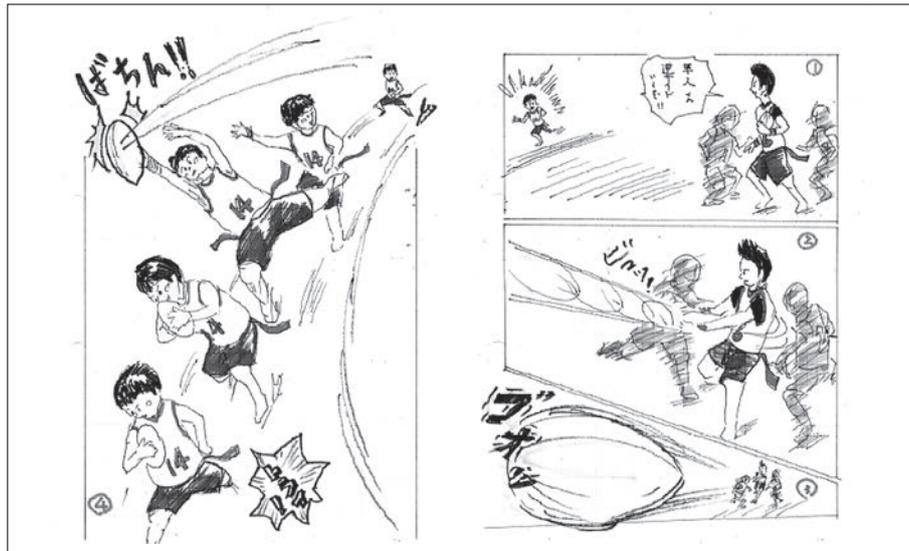


図6 相手守備をひきつけて、走りながらのパス 隼人君とのアレンジ

止まったり、後退したりする様子があった。スタッフの励ましや、「より前進した位置でタグを獲られることの戦略的なメリット」の説明をするものの、やはり相手守備に迫られることで躊躇していた。立ち止まったり、後退したりしないまでも横方向（ゴールラインに対して水平）に逃げるような様子が続いた。

そこで、寛人君が思い切りよく、目的的に有効なプレーをする姿を願った。このとき、横方向に走らざるをえない消極的な心境を察しつつ、むしろそれが積極的、戦略的な動きとして活用できるよう、次のような手立てを講じた。すなわち、①寛人君は右サイドを駆け上がり、左に向かって走ることにした。②寛人君のその動きに合わせて、スタッフが左サイドから駆け込み、すれ違いざまにボールを受ける。③スタッフがそのまま左サイドのゴールを目指す（そのままトライするか、中央に折り返しのパスを出すかは、その後の戦略の発展として検討することにした）。

（2）評価

寛人君が右サイドを駆け出すと相手守備がそれを止めようと右サイドに向かった。寛人君は直角のカーブを描いて、横方向に方向転換すると、守備プレーヤーも追走した。このとき、守備プレーヤーは、タグを獲るチャンスとばかりに速度を上げる。それは、守備プレーヤーにとっては、二つ

の優位性が生じるためである。一つは、寛人君が臆して方向転換したと解せることでの心理的優位性、もう一つは、寛人君が背を向けて走ることによってタグが後方にたなびくことでタグを獲りやすくなるという戦略的優位性である。

しかし、気がつくやうに、寛人君はボールを持っていない。守備プレーヤーの注意の外ですでにボールは寛人君とすれ違ったスタッフが右サイドに持ち込んでおり、無人のゴールエリア右側にトライされている。寛人君は、この痛快な結果を見て、自分の動きが奏功したことを実感したようで、笑顔でスタッフにハイタッチを求めた。その後、寛人君はスタッフとの間でこのプレーを意図して繰り返した。臆して横に走るのではなく、積極的、戦略的に取組んだ。この様子ならびに心理過程と支援方法の関連を図7、図8に示した。

この戦略は、寛人君の動きをプレーの失敗としてみなすことではなく、チームの戦略として活かそうというものであり、実際に相手守備の陣形を崩すことに有効だった。なお、この戦略は、その後、別なチームによって新たに発展され、スタッフがそのままトライを決めるパターンと、中央スペースに駆け込んだプレーヤーへパスをいれるパターンが産み出された。

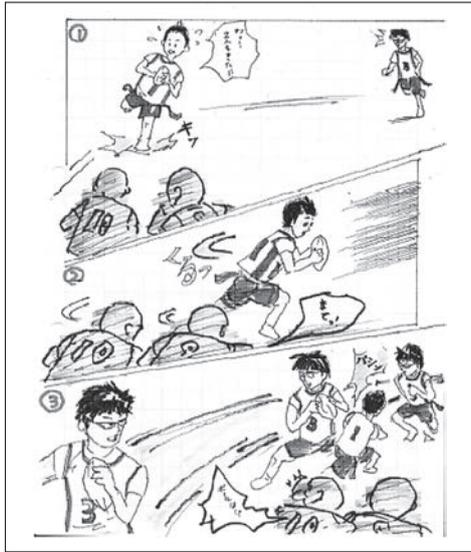


図7 新たに開発した支援方法
寛人君とのコンビプレー

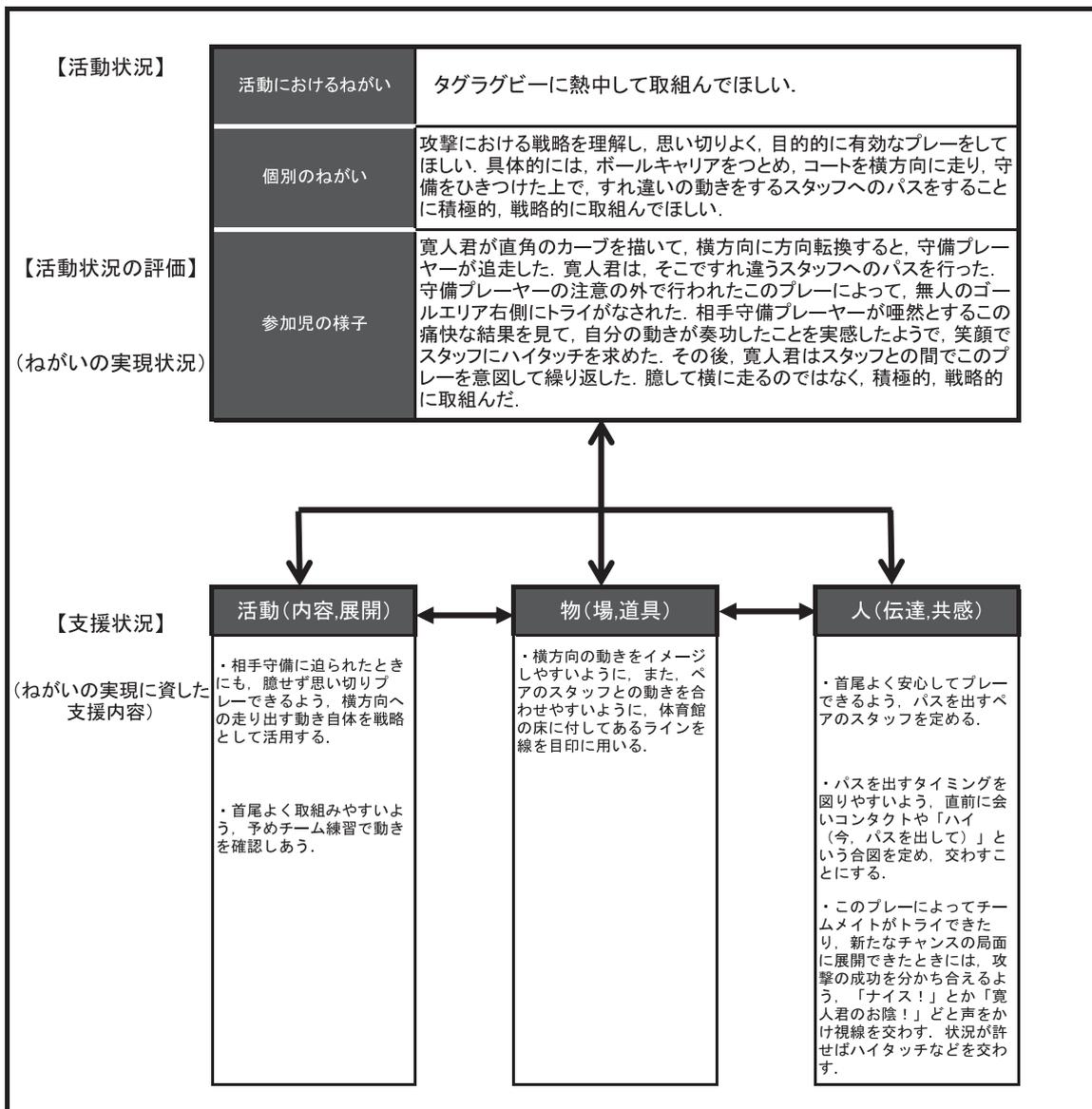


図8 攻撃プレーにおける、寛人君の心理過程と支援方法の関連概念図

Ⅳ 考 察

本稿では、参加児の活動や心的過程の変遷の分析及び、タグラグビーの参加児への支援内容・方法の効果を明確にすることをめざし、以下の3点に取り組んだ。

第一に、「タグラグビーにおける支援方法の検証」である。既得の支援方法を別の参加児を対象として用いた事例を挙げることによって裏付けた。第二に、「新たな知見の蓄積」である。既得の支援方法のアレンジ及び、新たに開発したタグラグビーの支援方法を挙げることによってその一助とした。これらに2つの取り組みは、実践において恒常的かつ発展的なテーマである。今後も検証、蓄積に努めたい。

第三に、「スタッフ間で伝達、共有可能な情報として活用しやすい表現形式の検討」である。既得の支援方法を視覚化した「マンガ形式」をスタッフミーティングにおける資料として活用した。その内容は、4チームそれぞれにおいて一定の共通理解がなされ、戦略に活用された。また、試合毎に活用の精度（戦略の完成度、支援の効果）の高まりも見られた。このことは、「スタッフ間で伝達、共有可能な情報として活用しやすい表現形式」としての有効性の一端を示したといえる。しかしながら、「マンガ形式」は、それ単独で有効なものではなく、それを基にした実技の打ち合わせなど他の伝達方法とも相まって有機的・相補的に機能していくものと考えられる。

また、本稿では、一部の「マンガ形式」に、心理過程と支援方法の関連の概念図を対照して加えた。前者が「外観（プレーの様子）」を視覚的に示し、後者が「内観（そのプレーの実現に資した支援方法の関連）」を視覚的に示したといえる。両者の活用と検証、評価については、今後の課題である。これに際しては、スタッフによる評価などを取り入れるなどの評価方法の開発も必要だろう。

なお、本稿では、参加児への支援内容・方法の検討を具体的かつ実践的に行った。このことは、支援内容・方法自体がタグラグビーの活動に即し

て具体的なものであったことによる。具体的な支援は、その是非の検討を容易にする。そして、具体的な支援を構想することは、参加児への個別のねがいが具体的であってこそ可能である。すなわち、個別のねがいに先立つ活動におけるねがい（参加者全員で共有されるねがい）から個別のねがいに至るまで、一貫してタグラグビーに打ち込むことを志向する内容であること、その上で個別のねがいが参加児の活動に即して具体的に掲げられていることが、支援内容・方法を具体的・実践的に検討することを可能にしたと考えられる。支援内容・方法の検討は活動目標（ねがい）の検討をも含み込むのであり、今後、精度の高い個別のねがい設定のあり方をも検討していきたい。

謝 辞

本報告をまとめるにあたり、ご理解、ご協力いただいた方々へ感謝申し上げます。第一に、エブリ教室の児童とその保護者の皆様。そして、ご一緒いただいたスタッフ諸氏。

注 釈

高機能広汎性発達障害とは、「知的障害を伴わない広汎性発達障害」という意味である。すなわち、知的障害を伴わない自閉症（いわゆる高機能自閉症）、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害包括する概念である。

文 献

- 1) 佐々木全, 加藤義男 (2011): 高機能広汎性発達障害児・者への支援の取り組み (2) — 「エブリの会」, 1998年から2010年までの経緯 — 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 10, 203-210.
- 2) 井沢信三, 岡村章司, 長澤正樹, 阿部芳久, 東川博昭 (2012): 高機能広汎性発達障害のある人への包括・生涯的な支援プログラムを考え

- る（１）—必要な支援の「軸」とは何か—，一般社団法人日本LD学会第21回大会発表論文集，200-201.
- 3) 中島真由美，門脇陽一，杉本浩美（2012）：地域のセンター校が実施する「サポート教室」に関する実践的研究—在籍校の担任と連携した発達障がいの子どもへの放課後支援の取り組み—，一般社団法人日本LD学会第21回大会発表論文集，544-545.
- 4) 佐々木全（2012）：発達障害児（者）に対する「本人活動」における運営実態—岩手県内8グループを対象としたアンケート調査から，年報花童・風童，8，27-41.
- 5) 鈴木秀人（2009）：公式BOOK だれでもできるタグラグビー，小学館.
- 6) 佐々木全，伊藤篤司，名古屋恒彦（2012）：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第15報）—タグラグビーにおける支援内容と方法の明確化—，岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，11，233-242.
- 7) 佐々木全，加藤義男（2011）：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第13報）—ねがいの実現状況と，支援方法の関係性に着目して—岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要，10，211-220.
- 8) Act. マネージャー（2011）：花風レポート Act. ～クローバー×エブリ，放課後活動の試み，はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会 年報花童・風童，7，31.
- 9) 前掲論文6)